

一般社団法人粉体工学会第1回功績賞受賞者

向阪 保雄

授賞理由

向阪保雄氏は、粉体工学会に1970年に入会し、自らが専門とするエアロゾルに関する研究グループであるエアロゾルグループ会を1976年に発足させ、その後、エアロゾル部会に発展させた(1982)。エアロゾル部会が中心となり、粉体工学会のみに留まらない学際的な研究コミュニティとしてエアロゾル研究協議会を発足させ(1985)、さらにそれを日本エアロゾル学会へと発展させた(1992)。粉体工学会においては、国際交流委員長(1989-1992)、副会長(1991-1994)、編集委員長(1991-1994)、会長(1995-1998)の要職を歴任し、会長時には、研究奨励賞の設置、上滝論文賞への改称、ホームページの開設、シンボルマークの決定など、現在にも伝承されている重要な功績を残している。その他の学協会では、日本エアロゾル学会副会長(1992-1994、1996-1998)、化学工学論文集編集委員(1985-1987)、静電気学会理事(1975-1990)、Journal of Aerosol Science エディター(1980-1988)、Aerosol Science and Technology エディター(1986-1990)などの要職を歴任し、国内外の粉体工学に関連する学協会活動の発展に貢献してきた。

同氏は、気相や液相中における微小粒子の挙動の理解に関する基礎的な研究から、その研究で必要となる粒子径の分布を測定できる計測器を新たに開発し、その製品化に至る応用的な研究までを世界に先駆けて展開した。とりわけ、微小粒子のブラウン運動による粒子同士の衝突合体する凝集現象に関する研究は、理論的な研究に終止符を打つ大きな実験的成果を上げ、世界的にも高く評価されている。また、研究の過程で必要となり開発した凝縮核計数器は、光学的には検出不可能な微小粒子を独自の方法によって検出可能にする世界初の計測器であり、製品化されている。これらの成果は粉体工学会が発行する論文誌23編を始めとして研究論文145編、著書17編、解説55編に纏められている。その他に粉体工学会誌の巻頭言を3回執筆し、1回目は夏期シンポジウムのオーガナイザーとして、微粒子をつくると題して、2回目は粉体工学会誌編集委員会委員長として、30才を迎えた粉体工学会と題して、3回目は粉体工学会会長として、40周年を迎えた粉体工学会と題して、国際交流の重要性に言及している。粉体工学会誌に2回の海外報告を寄稿(1979,1985)し、第2ラウンドの国際交流と題した座談会(出席者：井伊谷鋼一先生、森川敬信先生、神保元二先生)の司会を務め、その様子は粉体工学会誌(1984)に掲載されており、粉体工学会の国際交流に対して熱心に取り組んだ。2020年には、新型コロナウイルスのエアロゾル感染の可能性に関する研究ノートを筆頭著者として執筆し、粉体工学会誌に掲載されており、御年83歳となった現在も粉体工学会に貢献されている。以上の業績等がきっかけとなり、粉体工学会上滝論文賞、化学工学協会論文賞、Maurice Symson Technical Editor's Award、日本エアロゾル学会論文賞、ホソカワ粉体工学振興財団KONA賞など、数多く受賞し、2015年には瑞宝中綬章を授与されている。

以上のように、向阪保雄氏は、粉体工学会の学会活動、学会誌、集会行事などを通じて粉体工学の発展に顕著な貢献をされたと認められたので、粉体工学会功績賞を授与する。

以上